

兵庫県川西市で毎年恒例のみつなかオペラが開催され、今年はドニゼッティ三部作のうち2作目、円熟期の隠れた名作「ラ・ファヴオリータ」が上演された。王の愛人レオノーラに、事実を知らず恋をした修道士フェルナンドの悲恋の物語。父は修道院長、実の姉

みつなかオペラ 「ラ・ファヴオリータ」

名手が生んだ稀有な瞬間

が王妃という複雑な人間模様が、スペインの修道院と王宮を舞台に描かれる。

本公演の特徴は、物語の複雑さや非日常的な世界の出来事をごくシンプルに描こうとした点にある。バレエ付きの「グラントオペラ」の豪華さはそのままに、劇展開のスピード感を重んじたイタリア語版を使用した

仲野達也撮影

のも英断の一つだろう。

小さな尺の舞台で、装置や群集の配置を整理し、象徴的な効果を狙ったアントニオ・マストロマッティ（装置）、井原広樹（演出）のセンスも光った。牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団も、力強さと室内楽的な繊細さのバランスが秀逸だった。しかし、このオペラの勘所は、物語の展開、結末の

すべてに説得力を与えた歌手の力量にある。2日目に

歌ったフェルナンド役の松本薫平Ⅱ写真左Ⅱは、恋に盲目で血気盛んな若者から、名誉か愛かの選択に苦悩し、成長する青年までを見事に演じた。終幕の「やさしい魂よ」で歌われるハイクが、単なる技巧の披露ではなく、心の葛藤を描く物語の必然として感じられた意義は大きい。

レオノーラ役の福原寿美枝Ⅱ同右Ⅱは抜群の安定感で、温かくて深いメゾソプラノの声質が、悲哀を帯びたファヴオリータ（愛人）の存在を表現した。

時代や設定をも超えた普遍的な「人情ドラマ」は、420席の小空間を包み込んだ。ホールオペラが目指す「身近さ」と「オペラ芸術としての壮大なスケール感」の両立を味わった稀有な瞬間であった。

（神戸大准教授）

9月25日、兵庫・川西市みつなかホール。

